（別紙２）

審査の結果の要旨　　氏名　堀　朋平

本論文は、シューベルトの音楽実践とロマン主義との接点を明らかにする試みである。

著者によれば、1817年から1825年頃までのシューベルトの「ロマン主義時代」に書かれた楽曲の内には、音楽の連続的流れを垂直的に断ち切るような〈他なるしらべ〉があり、この独自な音楽語法は、当時のロマン主義の動きと呼応しつつ、現実とは別の世界への憧憬を強調する志向を有する。序論は、こうした志向を解明するには、音楽と歌詞、交友関係、思想的背景、歴史的状況など多面的な層に学際的に迫る必要があると指摘する。

全６章からなる本論を通して縦糸的役割を果たすのは、シューベルトの友人ショーバーである。第１章は、ショーバーの詩による歌曲《巡礼の歌》の（とりわけその和声的特徴についての）詳細な分析を通して、作詞者と作曲者がともに、人々の幸福な共生と個人の永遠なる孤独という両極に引き裂かれていたことを明らかにし、そこに近代的概念としての「さすらい」（ノヴァーリス）の特徴を読み取る。

第２章は、1820年代の批評文を読み解きつつ、シューベルトの楽曲が前時代の規範を逸するような先鋭的な和声によって、規範と自由の相剋という両義的な心理状態を聞き手に喚起するものであったことを、歴史的に論じる。

第３章は、シューベルトの友人関係とその思想的背景に焦点を移す。著者はシューベルトの友人たちの未公刊書簡の読解を通して、1810年代の初期友人サークルが啓蒙主義的傾向を有していたのに対し、20年代の交友関係（そこではショーバーが中心的位置を占める）が啓蒙主義からの離反をシューベルトにもたらしたことを明るみに出す。続く第４章は、20年代のシューベルトが日記や手紙において散文的現実の中に浮かび上がる「幻想」に着目するようになったこと、及び、同時期の彼の先鋭的な和声が幻想世界を際立たせるための戦略であったことを説得的に示す。

第５章はショーバーと並ぶ親友であったマイアホーファーの詩と、それに基づく歌曲に焦点を当てる。著者によれば、マイアホーファーは啓蒙主義的な初期サークルの一員であったが、同時に1817年頃からは現実からの逃避として芸術を捉えるロマン主義的傾向をも有し、その両極を揺れ動いたが、シューベルトがマイアホーファーの詩に付けた歌曲もこうした両極を卓越した仕方で表現している。最終章において著者は、1825年以降の後期作品をも視野に収めつつ、別世界を志向する〈他なるしらべ〉が1820年代のシューベルト作品を貫いていたことを総合的に論じ、シューベルトの音楽創作を支える根底に「楽園―分裂―和解」という物語があることを明らかにして全篇を閉じる。

シューベルトの「ロマン主義時代」を学際的に特徴づける本論文は従来のシューベルト像を一新するものである。多少レトリカルな表現に流れるところもあるが、全体として一巻の織物の観を呈する本論文は、著者のすぐれた力量を証するとともに、その方法において今後の音楽学研究の新たな流れを指し示してもいる。よって、審査委員会は本論文が博士（文学）の学位を授与するに値すると判断する。